

今月は
薮田佳奈が
書いています



地域おこし協力隊 奮闘記 Vol.30



▲集落の方々と交流しました

私はこの町に移住して2年がかりました。「まだ」と感じることもあります。「もう」と感じることもあります。今回は自分のテーマの一つでもある「移住」についての活動を書きたいと思います。

私は総務省が企画する「地域おこし協力隊」の制度を使って大山町に来ています。この制度は地域外の人材を受け入れ、地域協力活動を行い定住・定着を図るもので、現在日本中には2、500人以上の協力隊がいます。私自身も移住者の一人ということもなく住みたいと思つても住める場所がありません。知らない土地でいきなり家を購入するのはかなり冒険ですし、購入したとしても修繕が必要で、すぐに住める状態の家は多くありません。

もう一つは仕事です。住みたまでも仕事がなければ食べていけません。どちらの課題

あり、移住を希望しておられる人や移住促進のため奔走されている方など、移住にまつわる人々に出会う機会がとても多く、「移住」というキーワードにこれまで以上に興味を持つようになりました。

移住の現状

移住希望者はたくさんいるがすぐに住めないという現状が、大山町にはあります。

一つの理由は、空き家問題です。町の担当者や移住サポートセンターの方々のおかげもあり、空き家登録は増えていますが、賃貸可能な物件が少なく、借りてしばらく住むために作つたもので

短期間でも実際に住むこと

で、「自分が大山町で暮らしたら…」とイメージがしやすくなるのではないかと思っています。また、最近は仕事をしたいと希望する人には知り合いの芝農家さんのところで仕事を手伝わせてもらつた

も知り合いがいる土地なら、仮住まいさせてもらつたり、仕事を紹介してもらつたりで生きるかもしれません。移住希望者は、知り合いがない人がほとんどです。

移住に関する課題は他にもたくさんありますが、これらを少しでも軽減したいと取り組んでいるのが、シェアハウス「のまど間」と、私の自宅も兼ねる「てまひま」での活動です。

シェアハウスのまど間

昨年4月にオープンしたシェアハウス「のまど間」は、地方の暮らしや移住を検討する人、大山町に興味がある人が住むために作つたものです。

大山町にやつて来たときに心細かったこと、寂しかった時に町の人に助けてもらつてうれしかつた私自身の体験を活かして、どちらの施設もなるべくいろんな人と交流できるようにしています。「この町に住みたい!」「大山町が大好き!」という人が一人でも増えるようにこれからも活動していきます。

大山町に移住してきてすぐ、築137年の大きな古民家に出会い、購入しました。空いているスペースで現在は留学生やアーティストインレジデンスの受け入れなど、定期間住める場所としても使

用しています。また、いろんな人が交流できる場を作ろうと、月に1回のペースで飲食営業も始めました。

大山町にやつて来たときに心細かったこと、寂しかった時に町の人に助けてもらつてうれしかつた私自身の体験を活かして、どちらの施設もなるべくいろんな人と交流できるようにしています。「この町に住みたい!」「大山町が大好き!」という人が一人でも増えるようにこれからも活動していきます。

◆問い合わせ先

地域おこし協力隊・薮田
(080-2942-6517)